

Title	二〇一一年度聖学院大学マニフェスト：聖学院大学新年度 初頭教書
Author(s)	阿久戸，光晴
Citation	キリスト教と諸学：論集, Volume27, 2012.3：113-119
URL	http://serve.seigakuin-univ.ac.jp/rep/modules/xoonips/detail.php?item_id=3899
Rights	



聖学院学術情報発信システム：SERVE

SEigakuin Repository for academic archiVE

二〇一一年度聖学院大学マニフェスト

——聖学院大学新年度初頭教書——

阿久戸 光 晴

イエスが道をとっておられるとき、生れつきの盲人を見られた。弟子たちはイエスに尋ねて言った、「先生、この人が生れつき盲人なのは、だれが罪を犯したためですか。本人ですか、それともその両親ですか」。イエスは答えられた、「本人が罪を犯したのでもなく、また、その両親が犯したのでもない。ただ神のみわざが、彼の上に現れるためである。」（新約聖書 ヨハネによる福音書九・一一—三）

一 大震災後の瓦礫の前に立つて

三月十一日の東日本大震災の物的精神的瓦礫の前に、私たちは今立っております。先日、私はさる自治体の長の方から「神っているのですか」と言われました。私はしばらく沈思の後、「あの大震災は受難節の三日目に起きました。イエス・キリストの十字架が答えです。ここに神のご臨在があります」と。大地震は私たちの犯した何か個別の罪のためでしょうか（神なくして生きようとする私たちの罪の状態という課題はありますが）。イエスの弟子た

ちがかったと思ったように、ある人は「現代日本社会への天罰だ」と言うかも知れません。しかしイエスはけっしてそうは言われませんでした。そうではなく、私たちにふりかかる苦難は、神の御わざが新しく現れる入り口だと。神の子は地震のさなかに逃げまどい（イザヤ二四・一八）、大津波の中で苦しみもだえ（詩篇四二・六―八、六九・一）、瓦礫の中にため息をついて水を求め、力が渴く（詩篇二二・一五）ことを知っておられる方です。そして瓦礫を片づけ、被災者を助け出し、多くの傷つく方々の世話をし、救援物資を配り、身を粉にして働く人々とともに、新しい御わざをなしておられます。ここに神がおられます。

オバマ米大統領は日本大使館へ弔問に訪れ、「この三月十一日の大震災を日本の皆さんは必ずや乗り越え、さらに力強い国民となっていかれるでしょう」と言われました。そうです。私たちはこの大震災を乗り越えることができます。そのためには、三月十一日以降、私たちは今までとは変わらなくてははいけません。今までとは異なっており分ち合い、より温かい手を差し伸べ合い、そしてより力強くなることができます。事実あの日以降、多くの方々に秘められていた温かい心と熱情が今ほとばしり出ているではありませんか。

しかし一方で三月十一日があたかもまったくなかったようにすべてを元に戻す動きがあります。この出来事を明確にとらえ、誠実に対処し、未永く受け止めるべきではないでしょうか。そのことが変わるきっかけになります。二〇〇一年九月十一日の米国同時多発テロの後、世界貿易センターを九・一一以前とまったく同一物を再建する計画がありました。それは九・一一という事実がまったくなかったことにすることと同じ精神でした。しかし米国民はそうしませんでした。その代わりにあの場所に「記念碑」を建てました。

そもそもイエス・キリストは十字架で死なれて後、蘇生したことが復活だという異説がありました。それは十字架という事実があたかもなかったことにすることとパレルなのです。イエス・キリストの復活は、イエスが十字

架で死なれた後、霊の体をもってよみがえられたことです。さらに一九四五年八月十五日という敗戦があたかもなかったことにして、齒車を逆回しすることと同趣旨なのです。私たちは、三・一一をしっかりと憶え教育的に生かし、これを風化させず、これを契機として新しい社会と人間になるよう生かす大学でありたいと思います。

ところで本学はなにゆえ卒業式中止し、入学式や授業開始日を延期したのでしょうか。間断なく起こる激しい余震、国内外で受け止め方の温度差がはなはだしい不明瞭な放射能禍の実態、連鎖する不定期停電、被災地における生活必需品の滞りなどを憂え、何よりも学生・教職員のいのちと安全を守ることを最優先したこと、そして悲しみを共有して被災地へ少しでもより多くの物資が行き渡るように華やかな行事を差し控えることが理由でした。これはまさに連帯であり、分かち合いの精神です。東北学院大学・尚綱学院大学・宮城学院大学・仙台キリスト教育児院への水・火関連物資輸送などの実行も同じ精神の発露です。教育的にこの精神を生かすべく進もうではありませんか。

二二〇一〇年度をふりかえって

新年度の具体的課題に入る前に、昨年度の総括・反省をします（順不同）。

- (1) 教職員の全学札押出席の向上に努める。 ↓この点はやや伸び悩みでした。
- (2) 本学の設立の理念および教育憲章に掲げられる固有の使命をこれからも各人が共有し、常に立ち返るようにつづること。 ↓新年教職員研修会等で触れていますが、この点は恒常的に取り組む必要があります。

ます。

(3) 「財政再建」のため、costとinvestが混同やれてはならないが、cost cutは進められねばならない。

↓この点はまだ十分取り組まれたとはいえません。新年度以降の課題です。

(4) 定員割れは絶対防がねばならないが、量的確保の次元にとどまっていなくてはならず、本学の固有の教育の対象者としてふさわしい学生・院生の確保に努めること。また長期的視点から、学部・学科・研究科の存在の恒常的検討は続けるべきこと。

↓この点は今年度がターニングポイントとなったと思われる。

(5) キャリアサポート体制を強化し、本学の学生と院生が社会において使命を発揮できる可能性を広げるためにも、新規開拓をすること。

↓この点は大きな前進がありました。とくに人間福祉学科をはじめとして前年度以上に就職内定率を実質的に高めました。これには学部学科の就職部やキャリアサポート課の働きはもとより、荒川区・さいたま市・埼玉りそな銀行のほか、男子聖学院同窓会のご支援・ご協力がありました。

(6) 「国民読書年」に取り組み、全学あげて読書指導の実をあげること。

↓この点を政治経済学科・コミュニティ政策学科・日本文化学科が教育的に受け止め学生表彰まで持つて行っていたことは、本当に喜ばしいことでした。

(7) 児童学科の小学校教育免許試験および人間福祉学科の社会福祉士および精神保健福祉士の合格者・合格率の向上を課題とする。

↓検討をしていただきました。年度末に社会福祉士の合格率に大きな向上がありました。先生方のご努力に感謝いたします。この点で新年度の人事政策にも反映させました。

しかしこの点は本学が設立以来、伏線として持っている「教育者育成大学構想」の本質的使命に込める課題であることを忘れないようにしましょう。

(8)

子育て支援センターの発展の継続、みどり幼稚園との連携の強化、0歳児を含む未就園児保育の可能性の早急な検討、幼保一元化政策の検討。

↓子育て支援センターは順調に進展しています。幼保一元化政策の検討は早速今年度「児童における総合人間学の試み」研究会で鋭意研究されています。

(9)

スポーツ、音楽等特待生制度などを含め、また緊急経済支援措置などの検討を含め、社会的現実に対処したアドミSSION政策の再検討を継続すること。

↓緊急経済支援措置は今年度も順調に進展しておりましたが、あの大震災を受けて東北地区出身の受験生らに強力に適用いたしました（ちなみに在

学生にも別途適用制度を設けました）。本学はまさに時代の課題に応えました。なお、スポーツ特待生をアドミSSION政策に生かすことは今年度も進展しました。

(10)

本学と理念を共有できる海外の大学との連携を進めること。

(11)

総合研究所・大学院と学部との連携協力を推進すること。

↓検討はなされましたが、まだ十分ではありません。

(12)

図書館司書講習の再開と学術情報発信システム「SERVE」の運用を推進する。いっ。

↓司書講習は再開し（関係者のご努力に感謝いたします）、「SERVE」の運用定着はいくつか課題は残るものの、明確となりました。

三 新しい御わざとして私たちが具体的に成すべきこと

大震災を受けて、新年度において具体的に成すべきことは何か。以下の項目を順不同で挙げます。

- (1) 大震災を全学部学科で教育的に受け止め、神の御わざの意味をチャプレンたちとともに祈りつつ、深めていきます。この使命を憶えて今年度の全学礼拝の課題としましょう。
- (2) 被災地への支援を強力に推進すること。本学の限られた人的物的資源を賢明に測りつつ、的を射た支援を構想し、実行に移していくことを早急に進めたいと思います。この点は学院傘下各校とも連携の可能性を探りましょう。
- (3) 緊急経済支援措置は、入学生とともに在学生への適用を強力に進める必要があります。全学的に強力に対応しましょう。
- (4) 誤解を恐れずに申し上げれば、今回の大震災は学生諸君の生きる力の覚醒のきっかけになります。学生の自立的キャリア形成を教育的に支援する体制を就職部・キャリアサポート課を含め取り組みましょう。
- (5) アドミッション業務は、前年度限界に近く取り組みました。新年度は早々に構造的検討を進め、同時に大震災という突きつけられた時代の要請を積極的に受け止める大学の姿勢を強力に訴えていく方針を打ち出しましょう。
- (6) 大震災は余震や直下型地震を今しばらく継続させておりますが、いつ何時大きな震えが来ても落ち着いて対

応できるように、避難経路、交通手段が切断された際の誘導や物資の非独占的備蓄等、準備を怠らないようにしましょう。また耐震度の再確認をし、予算投入を優先して応急的あるいは抜本的に決断する必要があると思います。思い切った即断が問われることでもあります。

(7) 放射能降下に対する冷静でしかも蛮勇でない正確な判断が問われます。この点については英知を結集してまいりましょう。国内外で受け止め方の温度差がありすぎるからです。日本国籍外の先生方の本国政府の対応に理解を示しつつ、本学での学生への責任を確認したいと思います。戸外活動のクラブ学生の安全管理が責任的に重要です。

(8) そのうえで、いかなる緊急の必要性にも対応できるよう、西日本の大学との種々の提携を構想してまいりましょう。

(9) 震災に伴う今夏の停電対策として、聖学院サマータイムなどの採用を弾力的に検討し、電力等が可能ながざり被災地へ行き渡るようにすべく、省エネ節電に心がけましょう。

(10) いずれにせよ、財政再建にも取り組もうとしていた本学にとって、大震災対策と復興協力も重要課題となりました。出費を考えて行う必要があります、大学院・総合研究所もこの課題を共有していただく必要があります。

ともに乗り越えましょう。必ずや新しい「目的地」へ到達できると信じ、祈りつつ。

(二〇一一年四月十三日)